

動機づけの自己決定性が在日中国人留学生・就学生の 仕事満足感に及ぼす影響

目白大学大学院心理学研究科 譚 紅艷
目白大学人間学部 渡邊 勉
目白大学人間学部 今野裕之

【要 約】

本研究の第1の目的は、自己決定理論に基づいて、在日中国人留学生・就学生を対象に、かれらのアルバイト活動に注目し、かれら自身がアルバイト活動について、どのような動機づけを保有しているのかを検討する。本研究の第2の目的は、アルバイト場面における在日中国人留学生・就学生の動機づけの自己決定性と仕事満足感との関連について明らかにすることであった。日本の大学に在籍する中国人留学生・就学生350名（男性173名、女性172名、不明5名）を対象に、アルバイト動機づけ、仕事満足感について測定した。目的1においては、因子分析の結果、4つの動機づけスタイル（内発、統合、取り入れ、外的）を見出した。さらに、目的2においては、重回帰分析の結果、自己決定性の高い動機づけ（内発的動機づけ）は仕事満足感と正の関連を示した。これらの結果から、在日中国人留学生・就学生のアルバイト場面においては、自己決定的にアルバイト活動を行うことが仕事満足感につながることを示唆された。

キーワード：自己決定理論、動機づけ、仕事満足感、中国人留学生・就学生

問題と目的

厚生労働省の推計によると、平成16年の外国人労働者総数は79万8730人である。合法就労者は59万1431人であり、そのうち、「就労目的外国人」は19万2124人、日系人は23万1393人、留学生・就学生は10万6406人、技能実習生等6万1508人である（厚生労働省、平成16年）。現在、日本は少子高齢化が進展しており、外国人労働者の受け入れ議論が再燃しており、今後、外国人労働者は増加し続ける可能性は高い。日本における外国人の雇用状況を見ると、飲食店、宿泊業や卸売・小売業における東アジアの留学生・就学生（アルバイト）の販売・調理・給仕・接客員が特徴的である（厚生労働省、2004）。

今後の人生に大きな影響を与えると思われる青年期を、異文化の中で過ごし、また勉学に励むことは、多くの留学生・就学生にとって極め

て貴重な経験となるであろう。しかし、異文化と接触することは決して楽しいことばかりではない。異文化環境の中、留学生・就学生の勉学の目標達成の最大の障害の1つは、経済的困難であろう。経済的困難のために勉強に打ち込めず、勉強とアルバイトの両立に悩むことも多い（浅野慎一、2004）。仕送りだけで学費を払う留学生・就学生はごくわずかであるため、生活費や学費をまかなうために、多くの留学生・就学生にとってアルバイトの収入は必要不可欠なものとなっている。実際に、現在、留学生・就学生の8割～9割がアルバイトに従事していると言われる。

ここまで述べたように、アルバイトのため十分学習の時間を取れないことを悩んでいる留学生・就学生は多いものの（藤井・門倉、2004）、日本で勉学・生活していくためには、アルバイ

トをしなければならない状況にあると考えられる。つまり、留学生・就学生がアルバイトに従事するのは、外的要因（お金がほしいから）が大きく関わっていると思われる。しかし、これまでの動機づけ研究によれば、外的要因に基づいて行動することは自己決定感を下げ、心理的適応に悪影響を及ぼす。このことは、留学生の適応を考える上で重要な要素と考えられるが、実際には、留学生・就学生自身がアルバイトに従事する際にどのように動機づけられているのかを示す資料はあまり見られない。そこで、本研究では、自己決定理論（Self-determination theory : Deci & Ryan, 1985; Ryan & Deci, 2000）に基づいて、在日留学生数の7割以上を占める中国人留学生・就学生を対象とし、彼らのアルバイト活動がどのような動機づけに基づいて行なわれているのか明らかにすることを目的とする。さらに、アルバイト場面における在日中国人留学生・就学生の動機づけの自己決定性が仕事満足感に及ぼす影響について明らかにする。

自己決定理論（Deci & Ryan, 1985; Ryan & Deci, 2000）とは、内発的動機づけと外発的動機づけを自己決定の程度という連続体上で統合して捉える理論である。自己決定理論では、自己決定性（自律性）の程度によって動機づけを区別し、より非自己決定的な順に、外的動機づけ、取り入れの動機づけ、同一化的動機づけ、統合的動機づけ、内発的動機づけと分類されている。(1) 外的動機づけとは、外部から強制されて、「やらされているから」行動を行なっている最も非自己決定的動機づけであり、典型的な外発的動機づけといえる。(2) 取り入れの動機づけは、自己価値を維持したいものの、「やらないと不安であるから」などといった消極的な理由で行動を行なっている。この動機づけは、明らかに外的働きかけはないが、部分的に内在化されている動機づけであり、一応は自分で決めているところが外的動機づけとは異なる。(3) 同一化的動機づけは、取り入れの動機づけより一層自己決定が進んでいて、「重要だから」やるといった積極的な理由で行動が行なわれているものである。この動機づけは自己決定的な外発的動機づけのかたちである。(4) 統合的動機づけは外発的に動機づけられた行動の中では最も

自己決定のレベルが高い段階である。この動機づけは、行動を起す際に自分の日常生活や価値づけられた目標との適合度が高いこと、また行動が統合されていることを意味する。つまり、「やりたくて」その行動を行なっている。(5) 内発的動機づけは、外的な要求や罰に基づかない自己決定的な動機づけである。内発的に動機づけられた行動は、その行動自体が目的になっている。これは、興味や楽しさなどのポジティブな感情によって動機づけられ、行動の理由が完全に個人の内側にあるものである。

Deciらの考えは学習場面だけでなく、仕事、余暇、スポーツ、宗教、対人関係など様々な場面において実証されている。加藤他（2002）は、アルバイト学生を対象に、動機づけと職務満足感の関連を検討し、アルバイト場面においても、仕事に対する動機づけが、職務に関する達成、承認、責任、昇進といった職務内容に関係するだけではなく、対人関係とも関連していることを明らかにした。以上から、Deciらの動機づけに関する仮説は、本研究で取り上げる在日中国人留学生・就学生のアルバイト活動においても適用可能であると考えられる。

そこで、本研究では、先行研究の知見に基づき、具体的には、対象を在日中国人留学生・就学生に設定した。本研究の目的1は、自己決定理論に基づいて、留学生のアルバイト活動に注目し、留学生自身がどのような動機づけから、アルバイトをしているのか明らかにすることである。アルバイトは多くの青年が経験するだけでなく、その後の生活において重要な影響をもたらすことが知られている（学生援護会, 1995；大谷・河野, 1991）。ただし、現在のところ、留学生の生活（言語面、学習面）の報告、調査といった研究が多いが、実際に、留学生・就学生の生活の重要な一環としてのアルバイト活動においては、取り上げられている研究が極めて少ない。また、現在のところ、Deciらの連続性仮説の検証はなされていない。

一方、「自分で学費を稼いで大学で勉強したい。それが将来の展望につながる」と考えている在日中国人留学生・就学生にとっては、アルバイト活動は留学生活の一部と見られ、欠かせないものであり、またそれによって始めて、

彼らの留学・就学は可能になっていると考えられる。このことから、本研究における第2の目的は、アルバイト場面における動機づけの自己決定性が仕事満足感に及ぼす影響について検証することである。

方法

調査協力者と実施方法

2007年5月、都内にある大学生および大学院留学生と日本語学校就学生406名を対象に質問紙を実施した。そのうち、中国人留学生と就学生(台湾17名、香港6名)350名(男性173名、女性172名、不明5名)のデータを有効データとして分析の対象とした。

調査の手続きおよび倫理的配慮

都内の大学4つの大学(K大学、A大学、T大学、S大学)に関しては、授業時間中に質問紙を配布して調査を依頼し、回答終了後その場で回収した。なお、調査への参加は自由意思によること、無記名回答とすることにより個人の匿名性は守られることを紙面で教示した。中国人就学生(50名)に関しては、個別に手渡し、後日回収した。なお、調査への参加は自由意思によること、無記名回答とすることにより個人の匿名性は守られることを口頭で説明した。

調査内容

仕事満足度 加藤他(2002)が作成した職務満足度(10項目)を用いて、留学生の生活面を考慮し、7項目を採用し用いた。本研究では、現在働いているアルバイトに関して、回答は「1当てはまらない」から「4当てはまる」の4件法により評定を求めた。各項目の得点が高いほど満足感が高いとした。

アルバイト動機づけ 加藤他(2002)が作成したアルバイト動機づけ尺度は全19項目からなるが、本研究では13項目を用いて調査を行った。各項目に対して「1全く当てはまらない」から「5よく当てはまる」の5件法により評定を求めた。

なお、質問紙の実施にあたっては、日本語に習熟している大学生対象の調査では日本語版質問紙を、日本語能力が不十分と判断される日本語学校の学生に対しては中国語版質問紙を用いた。中国語版質問紙の作成にあたっては、いっ

たん日本語の質問紙を作成した後に筆者が中国語に翻訳した。その後、中国語専攻の日本人大学教員に、ニュアンスが正確に翻訳されているかどうかの確認を求めた。

結果

回答者属性

回答者のうち、年齢は20~24歳がもっとも多く(52.3%)、次いで25~29歳が(37.4%)となっている。留学生・就学生のうち、96.9%は私費留学生である。日本語レベルについては、「日常会話なら問題なし」という回答がもっとも多く(41.7%)、次いで「ほぼ十分についていけるが、専門の議論は難しい」という回答が(33.7%)となっている。

奨学金とアルバイト

奨学金有無とアルバイト有無の分析の結果によると、奨学金をもらっている人は全体の12.8%で、奨学金をもらっていない人87.2%に対し、はるかに少ないことがわかった。一方、アルバイトをしている留学生・就学生は全体の90.3%で、アルバイトをしていない留学生・就学生9.7%に対し、はるかに多いことがわかった。

仕事満足感尺度

仕事満足感の尺度については、下位尺度ごとに信頼性の検討を行った。信頼性係数 α は.78であった。一定の信頼性が認められたと判断して、以後の分析には合計得点を用いた。

アルバイト動機づけ尺度

在日中国人留学生・就学生のアルバイト活動においては、項目ごとの平均値をみると、「アルバイト経験が社会では必要だと思うから($M=3.75$)」が一番高く、続いて「アルバイトを続けたいと生活ができないから($M=3.49$)」と「今のアルバイトを通して、自分の成長を感じるから($M=3.42$)」となっている。一方、「一生懸命仕事することが楽しいから($M=1.51$)」の平均値が一番低いことがわかった。

アルバイト動機づけ尺度13項目に対して因子分析(主因子解、プロマックス回転)を行った。因子負荷量の絶対値.40以上を基準に、4因子11項目を採用した(Table 1)。第1因子は「アルバイトの仕事内容が面白いから」などの

項目に高い負荷を示し、「内発的動機づけ」因子と命名した。第2因子は「アルバイトが自分にとって大事で、他のことより優先させるほうがよいと思うから」などに高い負荷を示し、「統合的動機づけ」因子と命名した。第3因子は「とにかくお金がほしいから」などの項目に高い負荷を示し、「外的動機づけ」因子と命名した。第4因子は「アルバイトを続けないと悪い気がするから」などの項目に高い負荷を示し、「取り入れの動機づけ」因子と命名した。そして各因子におけるCronbachの α 係数は、第1因子のも

のから順に、 $\alpha = .78$, $\alpha = .76$, $\alpha = .70$, $\alpha = .67$ であった。第4因子の値は高いとはいえないが、一応の信頼性が保証された。

動機づけと仕事満足感との関連

留学生・就学生のアルバイト動機づけと仕事満足感の関連を検討するために、仕事満足感を従属変数、アルバイト動機づけ（内発、統合、取り入れ、外的）を独立変数とする重回帰分析を行った。得られた標準偏回帰係数の値をTable 2に示す。

Table 1 アルバイト動機づけ尺度の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転； $N = 350$ ）

項目	I	II	III	IV	M (SD)
I 内発的動機づけ					
2 一生懸命仕事することが楽しいから	.84	.18	-.00	.08	1.51 (.657)
1 アルバイトの仕事内容が面白いから	.71	.13	.01	.06	2.72 (1.26)
3 今のアルバイトを通して、自分の成長を感じるから	.68	-.06	.08	.16	3.42 (1.24)
II 統合的動機づけ					
13 アルバイトを通じて目標が達成できるので、他のことより優先させることにしているから	.11	.73	.08	.16	2.77 (1.30)
12 アルバイトが自分にとって大事で、他のことより優先させるほうが良いと思うから	-.07	.70	.21	.19	2.66 (1.28)
III 外的動機づけ					
9 とにかくお金がほしいから	.04	.16	.78	.11	3.39 (1.30)
10 アルバイトを続けないと生活ができないから	.00	.07	.60	.12	3.49 (1.27)
IV 取り入れの動機づけ					
6 アルバイトをしていないと何となく不安だから	.02	.13	.27	.63	3.05 (1.36)
4 アルバイトを続けないと悪い気がするから	.22	.28	.05	.61	2.82 (1.26)
7 アルバイトをすることは大事なことだと思うから	.22	-.02	.33	.46	3.26 (1.30)
5 アルバイトの一つもしていないと恥ずかしいから	.10	.33	-.06	.41	2.39 (1.26)
V 剰余項目（2項目）					
8 アルバイト経験が社会では必要だと思うから	.35	-.12	.24	.20	3.75 (1.17)
11 アルバイトの収入で、どうしても買いたいものがあるから	.15	.32	.35	.05	3.07 (1.27)
因子間相関	I	II	III		
	II	.16			
	III	.16	.19		
	IV	.38	.35	.42	

Table 2 アルバイト動機づけ下位尺度と仕事満足感の重回帰分析の結果

	仕事満足感
アルバイト動機（内発）	.41**
アルバイト動機（統合）	-.03
アルバイト動機（取り入れ）	.20**
アルバイト動機（外的）	-.00
R^2	.25**

* $p < .05$, ** $p < .01$.

アルバイト動機づけが仕事満足感に及ぼす影響においては、重回帰分析の説明率 (R^2) は有意であり、投入した独立変数で従属変数が説明できることがわかった。内発的動機づけは仕事満足感と中程度の正の関連を示した。また、取り入れの動機づけは仕事満足感と低い正の関連を示した。一方、統合的動機づけ、外的動機づけにおいて、仕事満足感と有意な関連は見られなかった。従って、動機づけが、ある程度仕事満足感に影響していることが示唆された。

考察

本研究の目的は、自己決定理論に基づいて、在日中国人留学生・就学生を対象に、留学生・就学生自身がアルバイト活動についてどのような動機づけを保有しているのかを調べること、また在日中国人留学生・就学生のアルバイト動機づけと仕事満足感との関連について検討することであった。その結果、以下のようなことが示された。

アルバイト動機づけ尺度について

本研究の第1の目的は、自己決定理論に基づいて、在日中国人留学生・就学生を対象に、かれらのアルバイト活動に注目し、かれら自身がアルバイト活動について、どのような動機づけを保有しているのかを検討することであった。その結果、以下のことが示された。各項目の平均値を見ると、在日中国人留学生・就学生は生活のためにアルバイトをするだけでなく、社会経験としてのアルバイトの重要性が認識されていることがわかった。つまり、留学生・就学生はアルバイト活動を通して、金銭面以外にも様々なメリットを感じていることが明らかになったといえる。また、因子分析の結果、内発的動機づけ因子、外的動機づけ因子、統合的動機づけ因子、取り入れ的動機づけ因子の4因子を抽出することができた。このことから、Deciらの動機づけに関する仮説は、本研究で取り上げる在日中国人留学生・就学生のアルバイト活動においてもある程度検証されたといえる。

動機づけと仕事満足感との関連について

本研究の目的の2つは、在日中国人留学生・就学生のアルバイト動機づけと仕事満足感との関係について検討することであった。その結果

、以下のことが示された。仕事満足感ともっとも関連が強くなっていたのは内発的動機づけであった。以上の結果から、内発的動機づけを高く持ってアルバイト活動に従事すると、仕事満足感も高くなるということが明らかになった。内発的動機づけとは「アルバイトの仕事内容が面白いから」「一生懸命仕事をするのが楽しいから」など、行動を起こす際の自己調整が自己に対して十分に同化されたときに生じ、自分のその価値や欲求と一致していると認知しているというものである (Ryan & Deci, 2000)。つまり、このような自己決定的なアルバイト動機づけを有してアルバイトに従事することが、在日中国人留学生・就学生の仕事満足感につながるということが示唆された。自己決定理論によれば、自己決定の程度が高い動機づけを持つほど肯定的な結果と関連している (Ryan, Deci, & Grolnick, 1995)。本研究の結果も先行研究とほぼ一致するものであると考えられる。

一方、取り入れ的動機づけと仕事満足感に関しては、正の関連を示した。加藤他 (2002) の研究では、自己決定性が低い動機づけである取り入れ的動機づけと職務満足感の関連は認められなかった。本研究の結果は加藤他 (2002) の結果とは一致しなかった。また、外的動機づけは予測と異なり仕事満足感との関連もほとんど認められなかった。以上から、自己決定性の高い動機づけ、すなわち内発的動機づけはアルバイトの満足感と正の関連を持っていたが、自己決定性の低い動機づけ (取り入れ、外的) は満足感と負の関連を示さず、自己決定理論による予測は部分的にしか支持されなかった。多くの留学生・就学生は生活のために、アルバイトをしないといけないなど外発的な理由でアルバイト活動を行なっていると考えられる。つまり留学生・就学生は総じて外発的動機づけが高く、そのため、アルバイト満足感においては、自己決定性の低い動機づけとは関連が認められなかったのかもしれない。ただし、今回の調査結果だけをもとに論じるのは時期尚早であり、同様の結果が再現されるか、今後の研究が必要であろう。

本研究の結果は、次の二つの点から意義の大きいものといえる。まず第1に理論的意義であ

る。自己決定理論 (Ryan & Deci, 1985; 2000) によれば、より自己決定的に遂行された行動は適応的な結果と関連があるという。本研究の結果は、おおむねこの理論的予測に合致しており、自己決定理論の妥当性を裏付けるものであるといえよう。第2の意義は、留学生・就学生のアルバイト活動に関して重要な示唆を与える、という点である。内発的動機づけを高く持ってアルバイトに従事すると、アルバイト活動において満足感が高いということが示唆された。したがって、アルバイト活動における留学生・就学生の援助において、留学生・就学生が内発的動機づけを強く持てるように指導・援助することで、日本に留学してからのアルバイト活動の適応を促進し、不適応を予防することが可能になると考えられる。

今後の課題

本研究では十分に検討できなかった点について取り上げ、今後さらに有効な示唆を得るための課題について述べる。

本研究で使用した内発的動機づけの項目内容的に見て満足感とやや類似したものを測定してしまった可能性がある。今後は仕事満足だけでなく、職務へのコミットメントや勤務状況など、他の指標を用いて動機づけとの関連を検討し、今回の知見の再現性などについてさらに検討する必要があるだろう。

最後に、日本企業への就業を目的とし、在留資格を変更する中国や韓国等のアジア留学生が増加している (経済産業省, 2005年)。現状では日本企業における人材不足を背景に、近年、日本企業は積極的に外国人留学生を採用する姿勢を見せている。法務省入国管理局が公表している最新の統計によれば、平成19年、「留学」から「人文知識・国際業務」「技術」などの就労資格を取得し日本で就職した外国人の数は10,262人と史上最高を更新した。このような日本の労働市場の変化を考えると、留学生の動機づけを高めること、また留学生の自律性の支援を行い、外国人労働者の仕事満足を高めることは今後の大きな課題だといえよう。

謝辞

本論文の質問紙作成にあたり、目白大学中国語学科の竹中佐英子先生から貴重なご助言を頂きました。心より御礼申し上げます。

引用文献

- 浅野慎一 (2004). 中国人留学生・就学生の実態と受け入れ政策の転換 労働法律旬報
- 浅野慎一 (1997). 日本で学ぶアジア系外国人 大学教育出版
- Deci & Ryan (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum
- 大谷尚子・河野美佐子 (1991). 高校生のアルバイトが生活行動・意識に及ぼす影響に関する実態調査—健康, 学校生活, 労働観への影響— 学校保健研究, 33, 186-195.
- 藤井桂子・門倉正美 (2004). 留学生は何に困難を感じているか: 2003年度前期アンケート調査から 横浜国立大学留学生センター紀要, 11, 113-137.
- 学生援護会 (1995). 94年度首都圏高校生・大学生のアルバイト実態調査
- 経済産業省 経済産業政策局 (2005). 外国人労働者問題
- 法務省入国管理局 (2007). 外国人労働者統計
- 加藤司他 (2002). 自己決定理論に基づく動機づけのタイプと職務満足感との関連性: アルバイト学生を対象に 人間科学研究, 9, 1-9.
- 厚生労働省 (2004). 外国人雇用状況報告
- Ryan, R.M. & Deci, E.L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of The of Intrinsic Motivation, Social Development, and Well-being. *American Psychologist*, 55, 68-78.
- Ryan, R.M., Deci, E.L. & Grolnick (1995). Autonomy, relatedness, and the self: Their relation to development and psychopathology: In D. Cicchetti & D.J.Cohen (Eds.), *Developmental psychopathology: Theory and methods*, 618-655. New York: Wiley.

Autonomous motivation and job satisfaction : Chinese students in Japan

Hongyan Tan Mejiro University, Graduate School of Psychology

Tsutomu Watanabe Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Hiroyuki Konno Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2009 vol.5

【Abstract】

The purpose of the present study was to examine the relation between autonomous motivation that based on the self-determination theory and job satisfaction in Chinese students in Japan. Data obtained from 350 Chinese students (173 males, 172 females, missing 5) .Items of part-time jobs motivation scale and Job satisfaction scale were employed. The results showed that part-time jobs motivation of Chinese students was used to identify 4 motivational styles: autonomous, integrated, introjected and external motivation. Also, it showed that high autonomous motivation related to job satisfaction. It was suggested that autonomous motivation was relative to job satisfaction of the Chinese students living in Japan.

keywords : self-determination theory, motivation, job satisfaction, Chinese students in Japan